《4》ネットワーク論から見た「ゆるやかなつながり」の意味

執筆
野沢　慎司
明治学院大学社会学部教授

1　はじめに―つながりへの期待と幻想

東日本大震災を経験した2011年の「今年の漢字」に「絆」が選ばれたことは記憶に新しい。その前年にNHKの一連のテレビ番組が孤独死などの問題を取り上げたことを発端とする「無縁社会」という言葉の流行とも連なりながら、個人間の関係を意味する「つながり」や「絆」、あるいは「コミュニティ」という言葉が様々な場で語られるようになった。そこには、経済状況のゆくえや震災復興の見通しの不透明さから来る日本社会の不安感が反映しているようにも思える。

そうした議論の前提となっているのが、家族や居住地域の中の人間関係は希薄化しているという現状認識である。その認識を裏返せば、かつては家族や地域のつながり（血縁や地縁）が今よりはるかに強く、頼りになるものだったという暗黙の前提が存在している。近年ヒットした映画シリーズ『ALWAYS 三丁目の夕日』が描く世界がそうしたノスタルジックなイメージの好例である。

しかし、現代人が維持している多様な人間関係の現実を捉える（測定する）ことはきわめて難しい。過去の時代における人間関係の実情を実証的データに基づいて正確に捉えることはさらに至難の業である。私たちの実感に反して、人間関係の衰退説を証明することは簡単ではない。少なくとも、この衰退説を一方的に信じてしまわずに、留保をつけておくべきだろう。常識化したこれらのイメージに反する現代および過去の事例を見つけることはさほど難しくないからである（注1）。

ひとつ明確に指摘できることは、人間関係や家族・コミュニティの衰退を嘆く主張は、最近になって急に出現したわけではないことである。同様の主張は、様々な立場から、近代化の歴史の中で繰り返し主張され、警鐘を鳴らしてきた。社会学者は、そうした主張の一翼を担ってきたわけだが、同時にこの命題に対して強力な反証と批判を展開してきてもいる。

誤解を恐れずに大胆に要約すれば、そうした批判者たちが展開した議論の中心にあったのが「ゆるやかなつながり」の（再）発見である。そして、その発見をもたらした分析ツールが「社会的ネットワーク」という概念である。以下ではネットワークという概念を使った研究から見いだされた「ゆるやかなつながり」について紹介し、それに着目する意義を論じてみたい。

2　ネットワーク論の視点から見たゆるやかなつながり

社会的ネットワークおよびそれに関連する諸概念に依拠しながら社会の様々な現象にアプローチする研究は、ネットワーク分析あるいはネットワーク論と呼ばれている。ネットワークという用語は、比喩的概念として古くから用いられてきたが、明確に定義づけられ、社会の分析ツールとして使用されるようになったのは1950年代以降のことである（注2）。そこから数えれば60年ほどの歴史をもっている。

社会的ネットワークの分析では、行為主体を「点」で表し、複数の点が相互にどのようにつながっているかを問題にする。この行為主体としての「点」に、企業などの組織や国家などを当てはめて、企業間ネットワークや都市間・国家間ネットワークを分析することも可能である。が、ここでは個人を「点」と考え、個人間の人間関係ネットワークに限定して話を進めよう。

「点」で表される2人の個人間に何らかの関係がある場合、点をつなぐ線を引いて表す。この「線」は、目に見えない関係あるいはつながりを可視化したものである。将来の配偶者に限らず、つながりのあ

（注1）例えば、家族の教育機能の衰退説を批判的に検討した広田照幸『日本人のしつけは衰退したか―「教育する家族」のゆくえ』（講談社現代新書、1999年）を参照。

（注2）L. フリーマン（辻竜平訳）『社会ネットワーク分析の発展』（NTT出版、2007年）参照。

る個人同士を（目に見える）赤あるいは別の色の糸で結んでみるわけである。ネットワークの研究では、この線を「紐帯（ちゅうたい）」と呼ぶが、これを「つながり」あるいは「絆」という言葉に置き換えても差し支えない。ネットワークとは、このような点と線によって描き出された、相互につながっていたり、いなかったりする一群の人々の関係構造を指している。現実の人間関係ネットワークの構造パターンがどうなっているのか、またネットワークの特性の違いが個人の意識や行動にどのような影響を与えるのかを分析するのがネットワーク論である。

このネットワーク論の研究系譜からは、「ゆるやかなつながり」に関しておそらく2つの論点を抽出できる。第一に、個人と個人のつながり方に関するもので、それが強く結ばれているのではなく、弱く結ばれている場合、つまり「ゆるやか」なつながりに着目しその意義を考察しようとする議論である。第二に、個々のつながりではなく、個人が持つつながり（紐帯）が構成するネットワーク全体を視野に入れた上で、そのネットワークに含まれる人たちが互いに皆つながりあって強固に連帯しているのではなく、隙間の多い「ゆるやか」につながりあったネットワークに眼を向ける議論である。

3　弱い紐帯としてのゆるやかなつながり

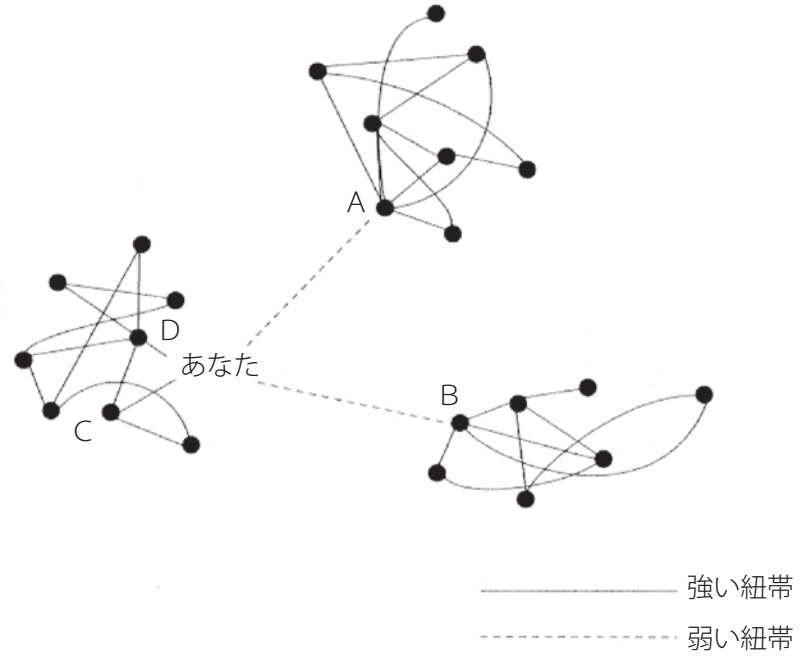
第一の論点、個人と個人の紐帯の性質としての「ゆるやかさ」に関わる問題から始めよう。この点に関しては、アメリカの社会学者、マーク・グラノヴェターの「弱い紐帯の強さ」（注3）という議論が参考になる。

紐帯の強さ（弱さ）とは何だろう。グラノヴェターは、①一緒に過ごす時間（頻度）が多い相手、②情緒的な結びつきが強い相手、③親密な相手、④互いに助け合うことが多い相手などが、強い紐帯（つながり）で結ばれた相手との関係にあたると説明する。これは私たちの常識的なイメージとほぼ一致するだろう。そして、一般的には、この強いつながりこそが私たちにとって大切なものであると信じられている。ちょっとした知り合いよりも、深い絆で結ばれた親友こそが頼りになるのは当然である。それに対して、現代では、弱くて浅いつながりばかりがはびこり、強いつながりが衰退してしまったと嘆かれ、「人間関係の希薄化」という決まり文句が（実証抜きで）繰り返されているわけだ。

確かに強い紐帯は重要である。では、弱い紐帯は何の役にも立たない不要なものなのだろうか。いくつかの研究結果に基づきながら、弱い紐帯にも独自の強みがあると、脱常識的な議論を展開したのがグラノヴェターの「弱い紐帯の強さ」論文である。彼の革新的な主張の要点は、弱いつながりの「橋渡し機能」にある。毎日のように顔を合わせる仲間集団（職場集団であれ、近隣集団であれ）に含まれる強い紐帯で結ばれた人たちからは目新しい情報やアイディアは入ってこない。慣れ親しんだ規範や価値観を共有している仲間内の世界なのだから当然かもしれない。一方、弱い紐帯で結ばれた相手は、それぞれ別の仲間集団に所属している人である。したがって、その人との弱い紐帯は、まるで別の小世界（別の価値観や規範の支配する社会）につながる架け橋のようなものである。そこからは、日頃慣れ親しんだものとは異質な情報、アイディア、視点などが流れてくる可能性が高い。

図1は、点と線で構成されたひとつのネットワークを示している。このネットワークの中で「あなた」はCさんやDさんと強い紐帯で結ばれており、それを取り囲む強い紐帯の交際圏に包み込まれている。これはいわば昔ながらのコミュニティである。一方、あなたはAさんやBさんと弱い紐帯でつながっている。めっ

図1　強い紐帯と弱い紐帯のネットワークの中の「あなた」



出所：R. バート（安田雪訳）『競争の社会的構造』（新曜社、2006年、21頁）一部改変

（注3）M. グラノヴェター（大岡栄美訳）「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編・監訳『リーディングス　ネットワーク論―家族・コミュニティ・社会関係資本』（勁草書房、2006年、123―154頁）参照。

たに会わない相手であるAさんやBさんは、あなたの知らない別な人たちと強い紐帯でつながっており、別の交際圏（コミュニティ）に属している。たまに会うAさんやBさんは、自分にはなじみのない別の世界（業界や地域社会）の情報をもたらしてくれる相手でもある。グラノヴェターは、専門職の人たちの転職は弱い紐帯でつながる相手がもたらした情報によって実現することが多いという調査結果から、弱い紐帯には自分が埋め込まれた狭い世界の外側にある情報への橋渡し機能があることに気づいたのである。

あなたが小さな仲間集団の中に埋め込まれて一生を過ごすのであれば、あえて外の世界への橋渡し的な人間関係を構築し、そこから情報を得る必要はないかもしれない。家族や近隣の仲間集団にどっぷり浸かって生きていけばよい。しかし、現代では、そのような人生は例外的である。進学によって交友関係は変化する。さらに、就職、結婚、出産、転居、退職などによって私たちの交際圏は移行する。それとともに強いつながりの相手も入れ替わることが多い。さらに、転職や離婚・再婚など、ライフコースの方向転換を図る出来事の経験率が上昇し、人生航路の道筋が多様化してきている。そのような社会環境のもとでは、強いつながりの重要性だけを強調し、頼みにするわけにはいかない。多方面に接続するゆるやかなつながりが提供してくれる多様な情報やサポートをうまく活用して人生上の予期せぬ事態や方向転換に対処することの価値に目を向ける必要があるだろう。そもそも、ともに過ごす時間が長く、深く関わり合う強い絆は、その定義上、少なくとも一時点で見れば、少数の相手としか取り結べない。それに対して数の上で勝る弱い紐帯は、多様な相手によって構成される守備範囲の広い情報源・援助源となる潜在力を秘めている。

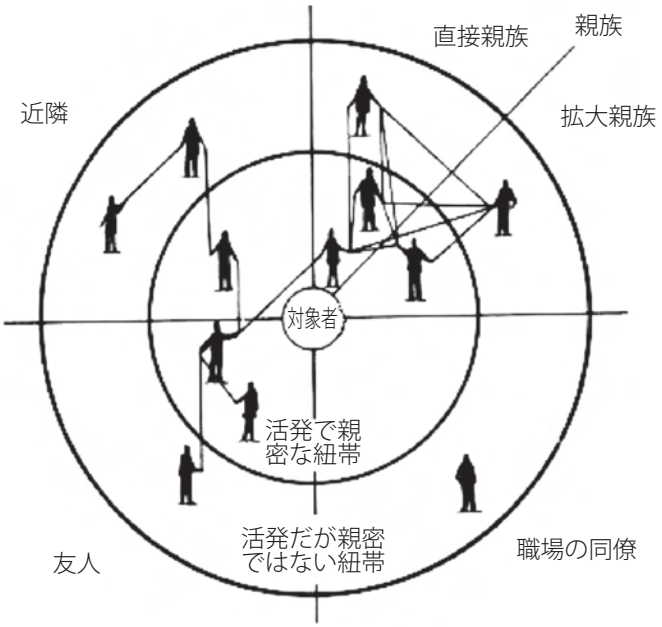
4　枝分かれしたネットワークとしてのゆるやかなつながり

第二の論点に話を移そう。強い紐帯によってつながる人たちが構成する交際圏については、ネットワーク論の視点から何が言えるのか。従来、重要な絆と言えば、基本的に「地縁」と「血縁」を指していた。現在普及しつつある「無縁社会」という言葉が使われるのは、たいていの場合、これまで頼りになったはずの地縁（近隣）と血縁（家族・親族）が脆弱化し、孤立した個人が増加しているという文脈においてである。そこでは、居住地近隣や世帯内に連帯した集団があり、それに埋め込まれている状態にない人たちは孤立しているとみなされやすい。これは、連帯した集団か、さもなくば孤立かという、二者択一的な理解の仕方だ。

ネットワーク論の立場から、従来のこうした考え方に対して鋭い批判を展開したのが、カナダの社会学者、バリー・ウェルマンである（注4）。暗黙の内に、居住地域を基盤とした集団のみを「コミュニティ」と考えるべきではない、と彼は主張する。従来のコミュニティ研究者は、近所づきあいだけに目を向けて、隣人とのつながりのない人は孤立している、所属するコミュニティをもっていないと判断してきた。しかし、例えば、隣近所に知人がいなくても、遠距離通勤・通学している職場や大学には親しい友人がたくさんいるという若者は珍しくない。彼らは決して孤独な都会人ではない。居住地近隣とは別の場所に豊かなコミュニティをもっている。

ウェルマンの研究の革新的な点は、「パーソナル・ネットワーク」という概念からコミュニティを考察したことである。従来のように「場所」に準拠してコミュニティを捉えるのではなく、「個人」を準拠点にして、その人間が形成している重要なつながりをすべてネットワークとして描き出すことによって「個人の」コミュニティを捉えようとした点で

図2　イースト・ヨーク住民の典型的なパーソナル・ネットワーク



出　所：Wellman and Berkowitz eds., Social Structures: A Networks Approach (Cambridge University Press, 1988, p. 27).　野沢訳

（注4）B．ウェルマン（野沢慎司・立山徳子訳）「コミュニティ問題―イースト・ヨーク住民の親密なネットワーク」野沢慎司編・監訳、前掲書（159―200頁）、およびB．ウェルマン・B．レイトン（野沢慎司訳）「ネットワーク、近隣、コミュニティ―コミュニティ問題研究へのアプローチ」森岡清志編『都市空間と都市コミュニティ』（日本評論社、2012年、近刊）参照。

ある。

図2は、ウェルマンが、カナダ・トロント大都市圏内のイースト・ヨーク地区で1970年代に行った調査結果に基づいて描き出した「典型的な」住民のパーソナル・ネットワークを示している。平均してみると、この調査の対象者は、近隣地区内に頻繁なつきあい（強い紐帯）でつながる相手が3人いる（左上の領域）。そのうち1人とは親しい関係にある。これがいわゆる地縁にあたるつながりである。近隣で孤立しているわけではないが、そこに豊富な人間関係があるわけでもない。しかし、他の場所にも視野を広げれば、この人は近隣以外に重要なつながりをかなりたくさん保持していることが見えてくる。

例えば、血縁にあたる親族関係（右上の領域）に眼を向けると、3人の直接親族（親子・きょうだいなど）と2人の拡大親族（おじ・おば・いとこなど）がいる。さらに、地縁や血縁とは別に、重要な友人3人が挙げられている（左下の領域）。そのうち2人は親密な友人である。それ以外に、職場では同僚の1人とのつながりが重要なものになっている（右下の領域）。

明確に読み取れるのは、私たちが維持している重要な絆は、境界の明確な、単一の地域的（親族的）集団（それが従来のコミュニティだと思われていたのだが）の内部に組み込まれているのではないことだ。私たちは、親族領域や近隣領域や職場領域にそれぞれ重要な絆を維持しており、それ以外の領域でも重要な友人などをもっているのだが、それらの領域間には比較的はっきりした溝がある。つながっている相手同士には（親族関係を別として）知り合い関係があまりない。自分の友人同士が友人であるとは限らない。友人と同僚は顔を合わせる機会がない（これは親族や友人の結婚披露宴に出席したときによく気づかされることである）。さらにこのことに関連して、図には描かれていないが、対象者のネットワークに含まれる人たちの居住地が地理的にかなり分散していることもウェルマンの調査から明らかになっている。親族や友人のなかには、きわめて遠距離の場所（例えば外国）に住んでいる人が含まれることも珍しくない。

この30年以上前のカナダの研究が明らかにしたのは、個人を中心に据えたパーソナル・ネットワークの観点から見れば、都市住民のコミュニティは地縁・血縁に埋め込まれた集団ではなく、非親族・非近隣の友人や同僚という関係をも含み、領域ごとに分岐し、空間的に分散した人々の集まりだという点だ。もちろん、現実のパーソナル・ネットワークは個人差が大きい。年齢、性別、子どもや職業の有無、居住地の特性（大都市か、農村か）などによってもその特徴は異なってくる。しかし、ウェルマンの研究以降、私たちのつながりの様相は、地縁・血縁に限定せず、重要なつながりの全体ネットワークを把握してはじめて理解可能になる、と認識されるようになった。1990年代以降、日本においても同様のネットワーク調査が繰り返し行われ、おおむねウェルマンの研究と同様の傾向が確認されている（注5）。

私たちは、弱いつながりをあちこちに張り巡らせているだけではない。強いつながりもまた、領域ごとに枝分かれし、空間的にも拡散した、ゆるやかな構造のネットワークとなっている。地縁・血縁の濃密な集団に埋め込まれていないからと言って、私たちは孤立しているわけではない。平均的な現代人は、「ゆるやか」なつながりのネットワークの中に暮らしていると考えるべきだろう。

5 ゆるやかなつながりとしての地縁・血縁

こうした研究知見から、私たちはどのような教訓を引き出すべきだろうか。

すでに述べたように、現代では人生の重要な出来事に出会うタイミングや内容が多様化している。その結果として、私たちの強い紐帯と弱い紐帯のネットワークも多様な世界へと枝葉を拡げる構造に変化してきていると言えるだろう（注6）。このような現状認識に立てば、地縁・血縁の衰退を嘆き、過去のノスタルジーにすがるのは非現実的である。向こう三軒両隣のすべてと親密につきあうべきと考えたり、多世代同居大家族の復権を求めることは、時代錯誤でしかない。

現代は、人生上の重要な出来事が、予定調和的にやってくるのではなく、偶然に依存して予期せず訪れる傾向を強めている時代である。そして、それにうまく対処するためには、公私の程度は様々な、社会的な制度・組織・個人との

（注5）大谷信介『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク』（ミネルヴァ書房、1995年）、松本康編『増殖するネットワーク』（勁草書房、1995年）、森岡清志編『都市社会のパーソナルネットワーク』（東京大学出版会、2000年）、赤枝尚樹「都市は人間関係をどのように変えるのか」（『社会学評論』62巻2号、2011年、189―206頁）などを参照。

（注6）このような変化を念頭に置いて、現代では家族とコミュニティの両方がプロジェクト化し、ネットワーク化していると論じたことがある。野沢慎司「プロジェクト化・ネットワーク化する家族とコミュニティ」高橋勇悦・内藤辰美編『地域社会の新しい〈共同〉とリーダー』（恒星社厚生閣、2009年、131―149頁）参照。

つながりが鍵になっている。例えば、少子高齢化に対応して推進された子育て支援政策の展開や介護保険制度の導入によって、育児や高齢者介護は私的な課題から社会的な課題へと変貌した。私たちが育児や介護という新たな人生上の課題に直面したときに重要なのは（いつ直面するかは個人差が大きくなっているのだが）、個人の奮闘や家族間の協力だけではなく、その外側にある施設、専門家・準専門家、同じような課題を抱えている当事者などとのつながりをどう作り、どう使うかである。内に籠もらず外に開かれ、新しい関係を開拓し、ゆるやかなつながりを活用して、適切なサポートや情報の交換を促進していくことが、課題達成のための要件でさえある。

外と言っても向こう三軒両隣的な狭い近隣だけを頼るのではなく、より広い社会を探索し、ときに遠距離の相手や弱いつながりの相手を含むネットワークを構築することで道が開けることがある。その探索において（グラノヴェターの研究が示唆するように）既存の弱い紐帯のネットワークが力を発揮する。しかし、育児や介護と言っても、例えば子どもや親が難病を抱えているような特殊な状況においては、既存のネットワークだけでなく、新たなつながりの模索が重要になる。求めているピンポイントの知識や技術を有する専門家や同じ経験をした当事者との出会いが渇望されるのだが、既存の手近なネットワークにおいてそれが手に入る可能性は低いからである。

インターネットの普及は、こうした選択的・探索的関係形成のコストを格段に下落させ、切望する出会いの確率をかなり押し上げてくれた。直面している問題や課題が特殊であればあるほど、同じような境遇に置かれた相手とのネット上の出会いが（面識がないにもかかわらず）深い共感や理解、支援や信頼をもたらすこともある。そのような場合、新しい弱いつながりが、ほどなく重要な強い絆へと変貌したとしても不思議はないだろう（注7）。

このように考えてくると、逆説的なことだが、少数の例外的な絆を別にすれば、地縁や血縁はその大部分が弱いつながりであり、潜在的なつながりであることに気づく。少なくとも現代においては（そしておそらくは過去においても）、多数の親族や近隣住民と親密な関係を結ぶことは困難である。強い信頼関係で結ばれる親しい相手の数は、どうしても限られてくる。地縁・血縁の中にそのような相手がいるとしても、そのほかの大多数の地域住民や親戚と親密な関係を維持するのは難しい。

しかし、図2にも示されているように、親族はメンバー間の知り合い関係が多く、もっとも連帯した領域である場合が多い。ときどきの冠婚葬祭の機会に顔を合わせることによって、かなり多くの相手と自動的にゆるやかなつながりが維持されうる。一方、隣人は、その物理的近接性ゆえに接触可能性がもっとも高い相手である。災害、急病、犯罪被害など、緊急事態の際にもっとも頼りになるのは、すぐに駆け込める近隣世帯の人たちである。いざというときに頼れるためには、必ずしも親密な深い関係である必要はない。弱い紐帯があることが重要である。友人関係まではいかずとも、友好関係を築いておくのだ。

一方、遠い親戚や近くの隣人は、それぞれ異質な職業世界に属し、異なるタイプの友人を持つ人たちでもある。近年、全国的に「おやじの会」や「隣人祭り」が盛り上がっているが、これは「弱い紐帯の強み（魅力）」の再発見が社会現象化したものではないか、と私は考えている。それぞれ異なる社交圏に属する近隣地区の人たちがたまに飲んだり、話したりすることで、日々の職場のつきあいにはない、新鮮で刺激的な風が生じることに人々は気づき始めたのではないだろうか。このようにして、ゆるやかなつながりの範囲を拡げる努力をしておくことは、人生上の新たな課題に直面した際に、新たな情報源として問い合わせる相手のストックを増やすことにもなる。

私たちは、地縁・血縁を強い絆の源泉であるとみなす先入観に囚われすぎて、ゆるやかなつながり形成の場としての地縁・血縁の意義を過小評価してきたのかもしれない。昨年の震災後に高まった絆やつながりへの関心は、強い絆に対してだけではなく、ゆるやかなつながりに対しても向けられることを願っている。

（注7）ステップファミリーという少数派家族を事例として、インターネット上の交流の重要性を論じた野沢慎司「インターネットは家族に何をもたらすのか―ステップファミリーにおける役割ストレーンとサポート・ネットワーク」宮田加久子・野沢慎司編『オンライン化する日常生活』（文化書房博文社、2008年、79―116頁）を参照のこと。